

## フィールドワーク

佐藤郁哉

“現場”で考え、現場を理解しようとするなら、どのような手だてをもって現場に臨めばいいのだろうか。もはや、被災者に、あるいは入院患者に、アンケート用紙を配ったり、通り一遍の質問ばかりのインタビューを試みるだけでは、何もわからないことは明らかである。

本書は、名著『暴走族のエスノグラフィー』（新曜社、1984年）によって、暴走族とよばれる人たちに広がる世界を見事に伝えてくれた著者が、現場観察の勘所をわかりやすく整理したものである。本書は、研究者や研究者の卵を主要な対象としているし、一見、ハウツーもののようにさえ見

える。しかし、きつと「こんな視点をもって、こんな方法で私たちの現場を見れば、現場のことは、よりよく理解できるようになるかもしれない」と実感していただける本だと思う。

本書は、フィールドワークを野良仕事にたとえ、膨大な時間と労力はかかっても、現場に身をおき、現場の視点に立って、観察することによってこそ、現場の理解が進むという立場から、様々な観察方法や、方法の背後にある考え方を紹介し、「対象と自分との不分離を自覚すること」の大切さを伝えている。しかし本書は、何もアンケートサーベイ等に我慢がならないとか、そんな方法は無駄であるなどと論じているのではない。“現場”で考え、現場を現場の視点から理解していくためには、「恥知らずの折衷主義」と言われようとも、現場の状況に応じて、様々な方法を用いる必要を述べている。もちろん著者は、「対象と自分との不分離を自覚すること」だけを強調するのではない。現場にとって「異人」であり続けて、「現場から一歩引く時間をもつこと」の大切さも論じ、現場との深すぎる関係（オーバーラポール）にも警告を発している。

臨床の知を念頭におきながら、フィールドワーカーとしての自分を省み、“現場”で考えていくことによって、「専門離人症」を癒していく過程、それが専門職にある私たちが“現場”で考えるということだと思う。



フィールドワーク；書を持って街へ出よう<ワードマップ>

佐藤郁哉，新曜社，1992年，  
本体1800円＋税。